

大倉陶園見学と猪之鼻庭での食事会



内田副会長率いる職業奉仕が、大倉陶園と猪之鼻庭での食事会を企画してくれました。当日は、茅ヶ崎文化会館前から大型バスに乗り、会員と会員家族総勢 45 名が参加いたしました。当日は、株式会社大倉陶園総務部黒澤様が大倉陶園の歴史やものづくりに関して丁寧な案内をしてくださいました。また、大倉陶園見学後は、「猪之鼻庭」に席を移して会員・家族と楽しいおそばに舌鼓を打ちました。

後日、黒澤様に案内の内容を確認したところ、文書を作成してくれましたので添付いたします。

職業奉仕の内田副会長・倉澤会員・長田会員ありがとうございました。

Made in JAPAN の粋 大倉陶園の歴史とものづくり

良きが上にも良き物を作りて、英国の骨粉焼、仏国の「セーブル」、伊国の「ジノリー」以上の物を作り出し度し。

大正 7 年 7 月 18 日 大倉孫兵衛 76 才

大倉陶園は、大正 8 年（1919）5 月 15 日、大倉孫兵衛・和親父子によって創業し、平成 31 年に 100 周年を迎えます。海外の一流メーカーを凌ぐ洋食器づくりを目指すという父子の情熱は、今なお当社に受け継がれております。

大倉陶園の歴史

大倉陶園の創業者大倉孫兵衛は、天保 14 年（1843）に生まれました。大倉家は当時、絵草紙屋を営んでおり、孫兵衛も幼少期から美しい浮世絵を目にして成長したことと思います。後に孫兵衛は大倉書店を創業し、明治 38 年（1905）には夏目漱石の『吾輩は猫である』を出版いたしました。

書店で成功する一方、輸出商社の経営者森村市左衛門との出会いにより、孫兵衛は日本の商品を海外へ輸出する貿易業に目覚めます。そして明治 11 年（1878）、市左衛門と孫兵衛は、ニューヨークに森村ブラザーズを開店し、日本の陶磁器をアメリカへ輸出し始めました。明治 8 年（1875）生まれの大倉和親は、慶応幼稚舎卒業後、

ニューヨークのイーストマンビジネスカレッジへ留学し、やがて森村ブラザーズで働き始めます。

その後孫兵衛と和親は、事業を発展させるため、日本の陶磁器だけではなく、国産の洋食器を輸出することを決断します。当時我が国ではほとんど前例がなかった洋食器生産技術を習得するために、二人はイギリス・フランス・ドイツ・チェコなどの国々で洋食器づくりを学びました。そして、明治 37 年（1904）、愛知県東郷の地に、日本陶器合名会社（現在のノリタケカンパニーリミテド）を設立いたしました。後に日本陶器は、東洋陶器（現在の TOTO）や日本碍子（現在の日本ガイシ）といった、世界的陶磁器メーカーを産み出すこととなります。

さて、念願であった国産の洋食器づくりに成功した孫兵衛でしたが、それに満足することなく、さらに高い目標に向かって歩みを進めます。それが、「海外の一流メーカーを凌ぐ洋食器づくり」という新たな事業であり、その夢を実現するために創業したのが大倉陶園です。

創業当時の大倉陶園は、陶磁器における最高級品をつくることを目指し、採算度外視のものづくりをいたしました。最高級のスペシャルホワイトカオリンを使用することによって実現する研ぎ澄まされた白磁の追求と、繰り返される装飾技法の研究は、先人達の飽くなき探求心により芸術の域にまで高められました。この頃に確立された技



法を現在に至るまで守り続けているのは、数ある陶磁器メーカーの中でも大倉陶園だけです。

大倉陶園が産み出す品々はまさに芸術品であり、内国博覧会や万国博覧会を始めとする美術展や産業展へ出品され、数々の賞を受賞いたしました。当時としてはたいへん斬新であった「和風のデザインが施された洋食器」は、美術界・産業界に絶賛されました。

このように、当初は一般に販売をしていなかった大倉陶園でしたが、大正 13 年（1924）第 11 回農商務省工芸展に出品した波斯模様果物揃を、ときの貞明皇后（大正天皇妃）がお買い上げ下さるという栄誉をきっかけとして、まずは皇族や華族・旧大名家が大倉陶園へ特注品を発注して下さるようになりました。以降、主に有名百貨店との取引を通じて、徐々に販路を広げました。

その後、昭和 18 年（1943）には、照宮内親王（昭和天皇長女）の婚礼食器を上納し、昭和 34 年（1959）には今上皇后陛下の婚礼食器を上納いたしました。また、昭和 49 年（1974）には迎賓館赤坂離宮へ、平成 17 年（2005）には京都迎賓館へ食器を納めました。さらに、平成 20 年（2008）には、洞爺湖サミットの各国首脳晩餐会で使用するサービスプレートを制作する栄誉に与りました。

創業以来 90 年以上の長きにわたり、大倉陶園は国産最高級の美術陶磁器メーカーとして、我が国の皇族や迎賓館をはじめ、一流ホテル・レストランに納めることができる限られたブランドであり続けて参りました。そして、世界中でも多数ご愛顧いただいております。

大倉陶園のものづくり

スタートはいいが、あとが続くまいと、人によくいわれたものだ。私は、金は失くしても、技術者諸君の腕とその作品が残れば満足しています。そして、父の気持ち一国内でよろこばれ、外国で驚かれるような品ができさえすればよいと思っている。

大倉和親

創業以来国産最高級の美術陶磁器をつくり続けてきた大倉陶園には、独特なものづくりの精神が流れております。

オークラホワイト

最高級カオリンを贅沢に使用し、世界最高の 1460 度で焼成する技法により、「セーブルのブルー、オークラのホワイト」と賞賛される白磁を完成させました。

岡染め／金付け

本焼きした白生地にコバルト絵具で絵付を施し、再度 1460 度の高温で焼成することにより、コバルトが釉薬と融合し、深みと優しさを加えながら美しい姿を現します。ハンドルや縁には筆で一点一点金が手塗りされ、白磁に美しい輝きを添えます。

手描き

日本画の技法を用いた繊細な素描技法です。大倉陶園の手描きの特徴は、分業ではなく、一人の絵師が一つの作品を最初から最後まで描き上げることです。国家技能検定 1 級を取得した選りすぐりの絵師たちが心を込めて制作する品々は、まさに芸術品です。

エンボス

型抜き直後の柔らかい素地にローラーを回転させながら模様を刻み込み、その部分のみ釉薬を施さず本焼きします。その後、金を塗布し、模様を浮き出させる技法です。高度の熟練を要するため、今日では大倉陶園だけが保持する貴重な技能遺産です。

漆蒔き

漆の上に絵具の粉を蒔き、それを綿で軽く摺りながら丹念に沈み込ませる技法です。他の技法では出せない色の深みや艶やかさが表現できます。世界から高い評価を受ける大倉陶園だけの技法です。

染め付け

施釉前の素焼素地に彩色する技法です。主にコバルトを含む顔料を用い、釉葉の下に着色するため耐久性が高くなります。最も伝統的な装飾法で、落ち着いた表現ができます。

瑠璃

白生地の上にコバルト質絵具をむらなく付け、本焼窯で焼き付けるという工程は岡染と同様です。白生地の釉面に絵具が一様に溶け込み、光沢のある深い紺青色になります。

金蝕

本焼した白生地にマスキングされた絵模様を貼り付け、細かい砂を噴射して生地の表面を削り（サンドブラスト）、モチーフを浮き彫りにする技法です。金を施して焼成すると、マスキングされた部分と削りとられた部分で金の光沢に差が出て、模様が浮き上がります。

オーダーメイド

大倉陶園では、オリジナルの食器やインテリア用品をオーダーメイドで制作することができます。専属デザイナーがおお客様のご要望をうかがって、一品限りの特別なお品物づくりをサポートさせていただきます。陶磁器メーカーとしては大倉陶園だけのサービスです。

大倉陶園のものづくりの精神は、まさに **Made in Japan** の粋を集めたものといえます。



残念ながら製造工程は撮影できませんでした。工場内のショップでのショットです。

大倉陶園見学後は、猪之鼻庭で会員と家族で懇親を深めました。

